



TITLE:

編輯後記

AUTHOR(S):

CITATION:

編輯後記. 天界 1942, 22(249): 106-106

ISSUE DATE:

1942-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168337>

RIGHT:

二階は全部を書庫と雑品の倉庫とした。又、一階は一部を倉庫とし、残りを工場とするつもりで、今、工事中である。晴雨計も此の一階のビラに取りつけた。北面に窓を二つ作つたので、此の一階は明るい良い室となつた。

地下室は1米半に2米半の大きさで、せまいものだが、一寸防空壕みたいな感じである。しかし、此の室は、時計室としたり、又、直立望遠鏡の鏡面を置いたりして、利用したいと思つてゐる。深さは地面から2米半もあるので、温度も割合ひに一定してゐる。しかし、今は末だセメントも乾かないし、防水も不充分的なので、今夏までかゝつて、良い構造にしたいと思ふ。

この二月中には、一階の東隣に寫眞の暗室を作るつもりである。大きさは1坪だが、水道の便もあるし、電氣の便もあるし、又、本屋への出入も都合が良いので、この暗室は、天文用のみならず、通信用にも家族たちが使用することと思ふ。

小ドームは、一昨年末に出来上つて以來、ズツと愛用されてゐる。大ドームに比べると、萬事に輕便で、又、展望も廣く開けてゐるので、つい誰でも此のドームに入り易く、従つて、エリソン機は多くの人々に愛せられてゐる。今年の夏頃まで、此の小ドームは、雨が漏れて、困つたが、防水紙の張つたので、其れから、雨は全く入らなくなつた。風の強い時、この小ドームの屋根が吹き飛ばされやしないかと、時々、心配するのだが、幸ひにして、過去一ケ年餘り20米内外の風には良く堪えて、何の故障も起らなかつた。——風のことで思ひ出したが、昨一月27日午後、急に20米ばかりの突風が暫へ吹きつゝつた時、大ドームの屋根が40°ばかり回轉して了つて、たま々々工事中の大工たちが之れを發見し、大騒ぎをしたらしい。ちようど、其の日、自分は京都に出かけてゐて、不在だつたが、今日歸つて來て見て、報告を聞いた。今後注意すべきことであるが、之れは、一面に於いて、屋根の杉材が漸次輕くなつた證據だとも言へる。

參觀人がボツ々々來られるが、上の如き事情だから今暫く待つて貰ひたい。工事の序でに、文庫や住宅の修理や模様變へなどもやつてゐるから、全部が一通り完成するのは、今春四五月の頃となる見込みである。

一月3日の朝、たま々々大雪(此の地方としては)が降つたので、其の朝、撮つた大ドームの寫眞を口繪に掲げる。之れが、この天文臺の寫眞として世に出る最初のものである。

(1942—1—28)

編 輯 後 記

本誌前卷(第21, 昭和16年)の總索引は第5號につける豫定です。